テレルジーン・ドルボルジン城址の発掘と匈奴の都市化研究の若干の成果

テレルジーン・ドルボルジン城址の発掘と匈奴の都市化研究の若干の成果

クラーディン N. N.[1]・イヴリエフ A. N.[2]・
ヴァスユーティン S. A.[3]・ハリンスキー A. V.[4]・
オチル A.[5]・コヴィチェフ E. V.[6]・
エルデネボルド L.[7]（大谷育恵 訳）

この 10 年間の間に、モンゴル領内の匈奴の居住址と城址の研究は活発化した [Ramsuyar, Pousaz, Törbat 2009; Danilov, Simukhin, Tsidenova 2011; Eregzen, Bayarsaikhan, Aldarmönkh 2014; Danilov et al. 2016; Ivliev et al. 2017]。本稿においては、2015 ～ 2016 年にロシア・モンゴル共同調査団が実施した匈奴城址テレルジーン・ドルボルジンの研究成果を報告する。

城址はすでに 1925 年に優れたロシア人のモンゴル研究者である B. Ya. ヴラディミルツォフ (Б. Я. Владимирцов) によって調査された。次いで遺跡は Kh. ペルレー (Х. Пэрлээ) によって調査された。彼はプラットフォームのうちの１つ (プラットフォーム

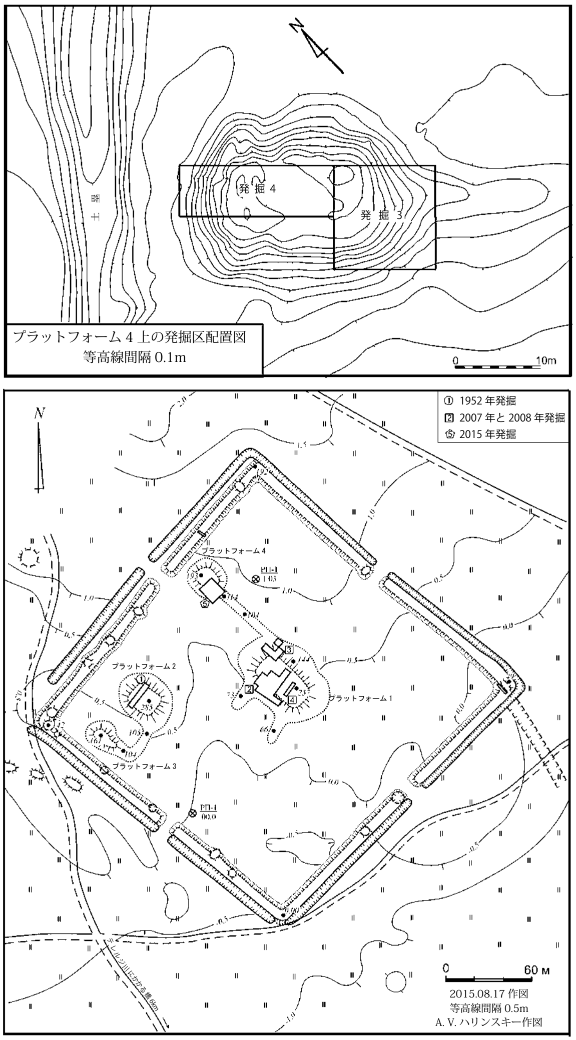

図１　テレルジーン・ドルボルジン

№2, 発掘 1) を発掘した。2007 ～ 2008 年には、S. V. ダニロフと L. エルデネボルドが率いたロシア・モンゴル共同調査団が同地で調査を実施した。調査団は最も大きなプラットフォーム (プラットフォーム №1, 発掘 2) を調査した。

当該遺跡について若干説明を加える。遺跡はヘルレン川支流のテレルジ川河谷に位置している。城址は 226 ～ 227m × 221m の方形である。外部の特徴に基づくと、城址は築城学的な基礎構造と城址としての特徴、すなわち①幅 12m 以下 (外側で高さ 1.5 ～ 2m、内側で高さ 0.6m 以下) で様々な規模で遺存している土塁、②幅 2 ～ 4m、深さ 0.2 ～ 0.3m の壕、③角の “ やぐら ”(それは北西角、北東角、南東角でよりはっきりとしている)、④門ー切れ目 (各土塁中央の位置にあって門に面する壕の間を連結している) 、を備えている (図 1)。考古資料から見た内部構造もまた複雑性に富んでいる。遺跡の広場部分に様々な大きさの高まり (プラットフォー

1　Крадин, Николай Николаевич (クラーディン , ニコライ・ニコラエヴィチ)　ロシア科学アカデミー準会員、ロシア科学アカデミー極東支部 極東の歴史学・考古学・民族学研究所長 (ウラジオストク)

2　Ивлиев, Александр Леонидвич (イヴリエフ , アレクサンドル・レオニードヴィチ)　歴史学博士候補、ロシア科学アカデミー極東支部 極東の歴史学・考古学・民族学研究所 (ウラジオストク)

3　Васютин, Сергей Александрович (バスューティン , セルゲイ・アレクサンドロヴィチ)　歴史学博士、ケメロヴォ国立大学 (ケメロヴォ)

4　Харинский, Артур Викторович (ハリンスキー , アルトゥール・ヴィクトロヴィチ)　歴史学博士、教授、イルクーツク国立工科大学 (イルクーツク)

5　Очир, Аюдагийн (オチル , アユダギーン)　歴史学博士、教授、遊牧文化研究所 (ウランバートル)

6　Ковычев, Евгений Викторович (コヴィチェフ , エフゲニー・ヴィクトロヴィチ)　歴史学博士候補生、ザバイカル国立大学 (チタ)

7　Эрдэнэболд, Лхагвасурэнгийн (エルデネボルド , ヒャグワスレンギーン)　歴史学博士候補生、助教授、モンゴル科学技術大学 (ウランバートル)

ム) が存在しており、そのうち規模の大きなプラットフォーム 1(最大高 185cm) とプラットフォーム 2(最大高 180cm) は土塁のような幅 10m 以下の独特の " 道状遺構 " を伴っており、それはより小規模のプラットフォーム 4 とプラットフォーム 3 につながっている (プラットフォーム 1 からは 4 へ、プラットフォーム 2 からは 3 へ " 道状遺構 " が続いている)。2007 ～ 2008 年の発掘の過程で判明したのは、" 道状遺構 " がプラットフォーム 1 の周囲を巡り、その後にプラットフォーム 4 へ伸びているということである。北西方向からプラットフォーム 1 には 2 本の " ひげ " 状の追加構造物が接続している (図 1)。これらの特徴的構造物はその機能的役割を明らかにすることはできていない。

2015 ～ 2016 年の発掘では、プラットフォーム 4(発掘 3 と発掘 4 の合計 252㎡) を調査した。発掘 3 は 12m × 12m の方形で、4 区 (Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ : 2015 年) の各 6m × 6m に分割した。発掘 4 は発掘 3 の北西に接し、6m × 6m(Ⅵ・Ⅴ・Ⅳ : 2016 年) の 3 区からなる 18m × 6m の細長い長方形である (図 1)。

発掘でプラットフォーム上に瓦屋根を有する建物址があることが明らかになった。基本的には崩れた瓦屋根が保存されており、主にプラットフォームの付近、斜面、辺に集まっている。プラットフォームの西の基礎に沿って、幅 0.55 ～ 0.8m の砂利舗装跡が現れた。プラットフォームの発掘 4 は地山レベルまで調査した。これにより、瓦細片はプラットフォームの高まりの中でみられることが明らかになった。

発掘 3 と 4 の主要な遺物は瓦で、それを除くと外装磚と鉄鏃が発見された。2015 年の発掘成果とこの城址に関する基本的見解はすでに公表されている [Ivliev et al. 2017]。本稿は両年の発掘で出土した瓦の基本的な特徴を示し、東アジアの瓦の中におけるその位置づけと年代を明確にしようとする試みである。

発掘の全過程において、発掘 3(144㎡) の発掘では 51,620 片の瓦片、総重量 2556.08kg を得た。発掘 4(108㎡) では 18,912 片の瓦片、総重量 1467.42kg を得た。これら全瓦は 2 つの形状のもので、瓦屋根に必要な組み合わせである。それらの形状は平瓦 (屋根の上に並べると下になるもの) と丸瓦 (上になるもの。平瓦と平瓦の間に被せる) である。後者の形の多様さは、下端に瓦当を有する軒丸瓦に表れている。発掘で出土した全資料はモンゴル国において恒久的に保存されるため、室内整理の過程で調査団の野外キャンプで全て整理された遺物は個別番号を与えられており、我々は以後の記述でそれを使用する。

遺物のうち、瓦以外では総重量 21.92kg の 68 片の磚が出土した。Ⅳ区 1 層において、2015 年の発掘では鉄鏃が発見された。発掘と現表土下では、その他二次的な人間の活動痕跡は確認されなかった。

全瓦の全体的な特徴について詳細に観察し、その胎土、表面の色、表面・側面・端面の処理について述べる。隣のプラットフォーム、すなわち S. V. ダニロフと A. オチルが率いたロシア・モンゴル調査団の発掘 2 から出土した同様の瓦の岩石学的な分析はすでに公表されている。その際に得られたデータによると、ミネラル組成のうち、石英以外では、長石、鱗状雲母、比較的大きな塊の花崗岩成分、ばらばらになった珪質粘土岩の楕円形の塊があった [Danilov et al. 2011: 38-41]。発掘 3 で出土した 2 つの形状の瓦の岩石学的な分析はロシア科学アカデミーシベリア支部地殻研究所の古プレート火成活動ならびに地学実験室で行われ、上記記載のミネラルに近いが、2 つはかなり異なった組成を示した。すなわちそれらの中で基礎となるのは水酸化鉄を含む泥質物質 (約 45%) で、約 40%は陸成物質、すなわち石英、長石で、少量が花崗岩片と雲母、きわめて少量が角閃石、である。試料組成のうちの 15%は耐火煉瓦片にあたる。2 点目の資料のミネラル組成には、粘土質のセメントが 35%のみ含まれていることを示した。ミネラル成分の組成は、石英 18%、長石 20%、同様に 25%の花崗岩片、白雲母 2%、角閃石 1%以下である。これに近い耐火煉瓦は存在しない。

一般的に全瓦は灰色あるいは褐色である。全瓦の表面には幅 1 ～ 3mm、深さ 1mm 以下の縦方向と斜方向の平行条線のたたき痕がある (図 2-1)。同様のたたきは中国漢代 (前 3 世紀～後 3 世紀) の瓦の特徴であり、漢ではそれは縄目痕であるが [劉振東・張建鋒 2007]、ここでは縄目たたきはみられない。たたきに用いた道具はおそらく長い木の板で、その上には平行の溝が刻まれていたであろう。しばしば縦線たたきの上に斜方向のたたきが存在する。また様々な方向に斜方向にたたきがなされた痕

がみられる。例えば平瓦№33(発掘3, Ⅲ区, d-12, 第3層)(図2-4)である。かなりの頻度で、特に凹面でたたき痕は平らである。このように丸瓦凹面で瓦片№40(発掘3, Ⅳ区, h-10/11, 第3層)(図2-2)のような4×5～7mmの長方形網目状のたたき痕がみられる。その他に、瓦凹面に両角を切り取った長方形あるいは台形の中に3本の平行溝状が入った特殊なたたきがあり(図2-3)、おそらく後者はたたき具端面の痕で、並行する細長い線が刻まれていたのであろう。たたきはしばしば瓦端面近くで平滑になっており、その付近で幅の広い緩やかに傾斜する面取りの切断面がみられ、瓦の側面につながっている。しばしば面取りされた面は、両面――すなわち瓦凸面と凹面、の両方から切られている。瓦の端面と側面は焼成前の円筒状半製品の切断過程で形成されている。したがって､側面は平らで平滑である。時には切断痕は凹面まで達しておらず、そこには丸瓦№68(発掘3, Ⅱ区, 1-4, 第5層)の玉縁部のように、やや乾かしすぎて破れた痕が見受けられる。時には、たたき痕は長さ1.5～3cmの繰り返されるスタンプ痕とみられ、瓦の端部にある。かなりの頻度で、特に瓦の凹面において、筒状の瓦半製品で形成された粘土紐の接合が確認できる。接合部では様々な形のおさえ痕がみられる。粘土紐の幅は3.5～5cmである。

平瓦は軽くくぼんだ形状で、截頭円錐形の筒を四分割したのに近い形をしている。実際に平瓦端面が完全に残っている破片に基づいてこのような筒の直径サイズを考察してみると、未成品の筒はあまり正確に等分の箇所を切られていない。したがって、4枚の同様の瓦の幅に基づいて復元しようとすると、完全な筒を形成するにはしばしば足りない。平瓦の形は台形で、その角は直角であったり、丸くなっていたり、あるいは斜めに面取りされていたりする。平瓦の隆起した面には横線と波線が様々な組み合わせで描かれている。明らかにこの線は円筒状の半製品が個々の瓦に分割される前に刻まれているので、線の末端は一致せず、同様のものが生みだされている。

破片から、完全――すなわち全長と全幅のある平瓦、は6点が復元できた。概して平瓦の幅の広い方の角は斜めに切り取られており、横断面は面取りされている。凸面は縦方向の条線文たたきで覆われている。おそらく条線文たたきは瓦上に水平

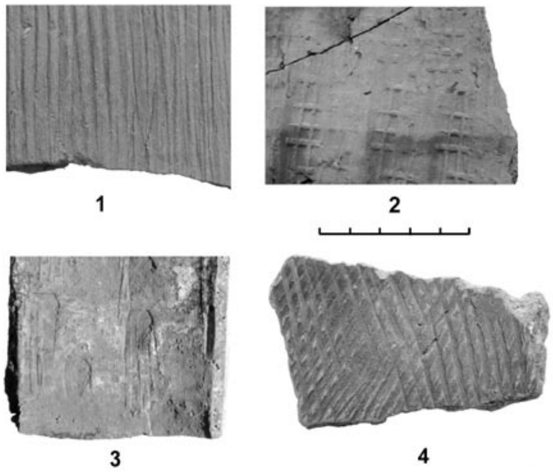

図2　テレルジーン・ドルボルジンの瓦表面たたき痕の基本的種類

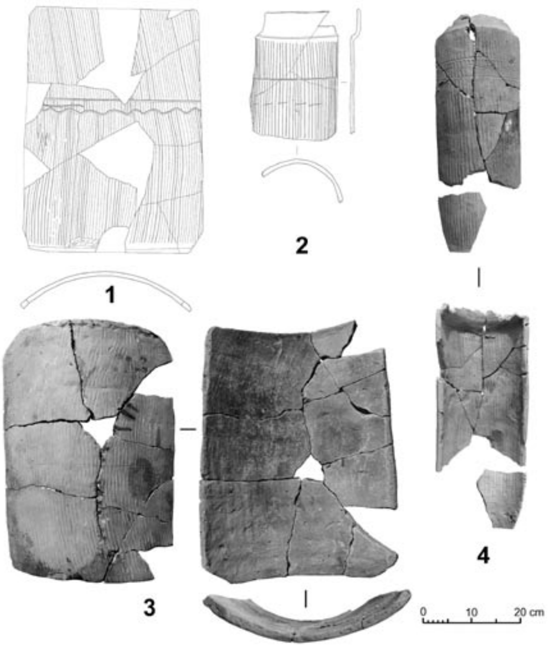

図3　テレルジーン・ドルボルジンの瓦基本種

1. 平瓦 (№35)　2. 丸瓦 (№43-2)　3. 平瓦 (№2016-9)　4. 丸瓦 (№2016-34)

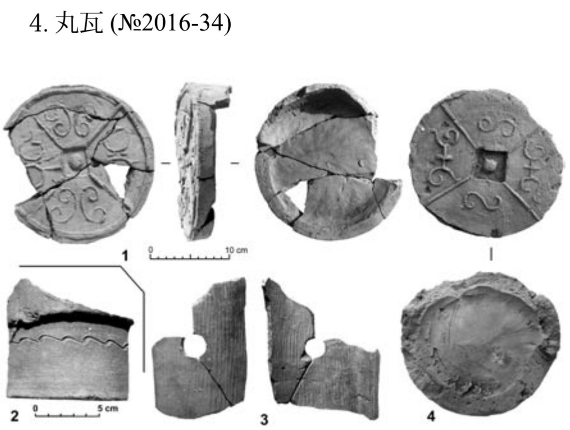

図4　テレルジーン・ドルボルジンの瓦

1. 瓦当 (№2016-45(1))　2. 文様のある丸瓦の玉縁 (№47)　3. 孔のある丸瓦 (№2016-25)　4. 瓦当 (№87(4))

表１　丸瓦のサイズ（cm）

No.	出土位置	瓦の幅			玉縁部の長さ	厚さ
		上端	中央	下端		
26-2	発掘 3, Ⅲ区 ,b-8, 第 3 層	13.3			5.2	0.7-1.3
39-1	発掘 3, Ⅳ区 ,h-11, 第 3 層			17.5		0.8-1.2
39-2				18.2-18.4		0.8-1.2
40	発掘 3, Ⅳ区 h-10/11, 第 3 層	14			5	0.8-1.2
41-1	発掘 3, Ⅳ区 h-10/11, 第 3 層				6	1.1
41-2		13.0-13.5			5.5	0.8-0.9
41-3		13.9			5.5	1.1
41-6				15.5		1.0-1.3
43-1	発掘 3, Ⅳ区 ,h-12, 第 3 層			21.5		0.8-1.4
43-2		16			5.3	0.9-1.0
44-2	発掘 3, Ⅱ区 ,h-4, 第 4 層			15		0.8-1.1
45-1	発掘 3, Ⅱ区 ,h-5, 第 3 層	15.1			6	1.0-1.3
47	発掘 3, Ⅳ区 ,k-7, 第 3 層	12.9			5.5	0.8
68	発掘 3, Ⅱ区 ,l-4, 第 5 層	15.5	19		5.8	0.8-0.9
76	発掘 3, Ⅱ区 ,j-6, 第 4 層				5	0.8
77	発掘 3, Ⅱ区 ,h-4/5, 第 5 層	14.5			5.3	0.9
78	発掘 3, Ⅱ区 ,j-7, 第 5 層	14			5.3	1.0
79	発掘 3, Ⅳ区 ,h-11				5	0.9-1.0
98	発掘 3, Ⅳ区 ,g-12, 第 7 層					1.1-1.2
2016-1	発掘 4, Ⅴ区 ,h-10, 第 1 層	14.3			5.8	0.9-1.3
2016-5	発掘 4, Ⅳ区 ,f-8, 第 2 層				5.5	0.95-1.2
2016-11	発掘 4, Ⅳ区 ,a-8, 第 3 層	13.4			4.8	1.05
2016-14	発掘 4, Ⅳ区 ,c-11, 第 3 層	13.9			4.2	0.8-1.0
2016-16	発掘 4, Ⅳ区 ,b-8, 第 2 層		15.5	16.5		1.1
2016-17	発掘 4, Ⅳ区 ,c-12, 第 3 層				7.5	1.05-1.2
2016-18	発掘 4, Ⅳ区 ,b-12, 第 3 層	13.9			4.5	0.9-1.3
2016-20	発掘 4, Ⅳ区 ,c-7/8, 第 3/4 層		14.5			1.1
2016-21	発掘 4, Ⅳ区 ,bc-7/8, 第 3/4 層		15.6-16.5			1.2-1.5
2016-27	発掘 4, Ⅳ区 ,c-12, 第 4 層	13.2-14.0	17.5		5.0	1.1-1.3
2016-28	発掘 4, Ⅳ区 ,c-9, 第 4 層		17.8			1.0-1.2
2016-34	発掘 4, Ⅳ区 ,c-12, 第 4 層		15.8-16.2			1.0

に幅 10 ～ 15cm の帯状に入れられ、加えてその各帯はやや傾いた形になっていた。得られた結果からは、瓦上方のたたきは左へ傾き、中央部は縦正位、下方は右へ傾いていた。このような軌跡をえがくたたきは、それ以前に付けられたたたき条線を乱していた。凹面の表面は平滑である。瓦 №35 の長さは 51.5cm、端の幅は 35cm と 37cm、厚さ 1.5 ～ 1.6cm である。2016 年調査で発見された全瓦のサイズは以下に近い値である。すなわち、その長さは 46.5 から 53cm まで、最大幅は 32 から 37cm までである (図 3-1, 3)。

丸瓦は筒の端から端までを半裁した形をしている。上端には玉縁部があり、上に葺いた瓦の下端の下に配される。玉縁部の表面には凸面から 0.3 ～ 1.2cm の段になっている。玉縁の両表面は回転台で仕上げた水平の筋の跡がある。また、玉縁は短い筒型に作られ、丸瓦の円筒形半製品が切断されるまでそれぞれくっついていたことが分かる (図 3-2, 4)。玉縁のいくつかの例では縦方向のたたき痕が目立ってあり、それらは回転台による仕上げまでにつけられていた。一般的に丸瓦の幅は、下端近くで 2 ～ 7cm ほど玉縁部分のその幅よりも広い。残念ながらその全長を復元できる丸瓦は 1 点もない。図 1 には丸瓦のその他のサイズを示した。

興味深いことに、4 点の瓦で玉縁の凸面上に、波線を湿った陶土の上に描いたものがあった (図 4-2)。このような波線は往々にして直線の横線と一対で、瓦本体の凸面にみられる。しかし、もし瓦身本体の上にあればそれは屋根上で見えるかもしれないが、玉縁部にある場合、この線は上に被さる瓦の瓦身本体の下で見えなくなる。同様に、平瓦上にある直線と波線装飾も見ることができない。なぜなら屋根上に凸面を下にして葺かれるからである。以上のことから思うに、瓦上の直線と波線は装飾機能を有しておらず、おそらく匈奴の土器上にある同様の図案装飾と同じような辟邪なのであろう。

そしてまた、発掘 3 と 4 で出土した丸い孔のある丸瓦 2 片について特記する。孔は瓦の真ん中の

部分を湿った陶土であった時に切り取っている。孔の直径は 2 ～ 3cm である (図 4-3)。同様の孔のある丸瓦片は、2007 年のロシア・モンゴル調査団が隣のプラットフォームで発見している [Danilov et al. 2011:38-39]。程永建の指摘によると、丸い孔は軒丸瓦にあけられたものであるという。穴は屋根の上に釘で瓦を固定するためのもので、それによって瓦が落下することを防いだ [程 2007:40]。

発掘 3 と発掘 4 の調査過程で、約 50 点の瓦当片を発見した。瓦当は瓦の筒下端に付き、屋根を装飾する。瓦当面正面もまた文様を持つ。半円形の半瓦当と円形の瓦当を用いる伝統は前 9 ～前 7 世紀の中国で現れ、現代まで東アジアの建築中に保持されている [Kryukov et al. 1983; 陝西周原考古隊 1981]。

発見された瓦当の中には、ほぼ完形の例がある。その 1 つが №2016-45 である。瓦当背面には幅 2cm、高さ 0.6cm の縁がある。瓦当は中心に向かって厚くなり、その表面をなでた放射状の痕がある。瓦本体の突出面には縦方向の条線文たたき痕がある。瓦当は瓦本体と共に半製品から切り取って作られている。諸資料のうち、発掘 3 で出土した瓦当 No.50 は、予めつけたケガキの切り口の痕が、瓦の側断面の接合部と瓦当背面の上端に沿った断面の箇所に残っていた。瓦当面の正面には、中央の半球形突出部が長方形のくぼみの中にある。くぼみの角から幅 0.7cm、高さ 0.2cm 以下の低い外縁に向けて輻射状に直線が伸び、瓦当面全体を四区画に分けている。向かい合う 2 つの区画に 2 つの対称になった先端の巻いた弓形文様 (モノグラム・タイプ：水平連結線のない “H” 字形) がある。それ以外の 2 区画は長方形のくぼみの長辺側であり、2 つの対称形に配置された先の開いたリング状文様がある。リング状文様の間には、片方から片方へと伸びる縦線がある。これら文様に向かって、長方形のくぼみの辺の真ん中の位置から放射状に直線が伸びている。瓦当直径は 20.3cm である。その外縁の厚さは 2.5cm である (図 4-1)。この瓦は発掘 3 と発掘 4 で最も頻繁に出土する瓦当文様のタイプ (第 1 バリエーション) である (図 5-1)。このような文様を有する独特の特徴ある瓦当には、正面の表面、そして時折背面に赤色塗料が残っている。

2 つ目の瓦当 №87 は輻射状の文様を持つ。外縁はほぼ残っておらず、その幅は 0.5cm はなく、その高さは輻射文に近く 1 ～ 2mm である。瓦に固定

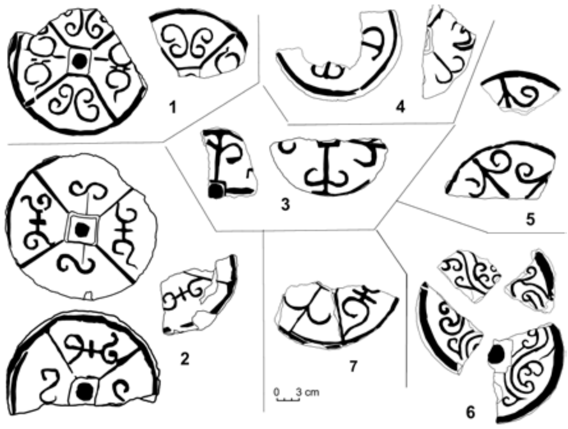

図 5　発掘 3 と発掘 4 で出土した瓦当文様の種類

されていない上端の背面はまっすぐに切り取られている。直角に近い背面の縁の形状は、丸瓦の横の縁の形へとつながっている。これは、軒丸瓦がすでに瓦当が取り付けられた円筒形の半製品から切り取って製作されたことを示している。おそらく両者の間は接合土で瓦当を瓦に塗り止めたのだろう。瓦当面正面の中央には、中央が突出した深さ 4 ～ 5mm の方形のくぼみがある。くぼみの角から外縁へと輻射線が伸びており、瓦当面を分割している。2 つの向かい合う位置の区画に、水平の “S” 字形文がある。それら文様へ向かって方形のくぼみの辺の中央から直線が伸びている。その不明瞭なことから判断すると、これは木笵の傷の痕であるかもしれない。別の二区画には、“Ж”(ジェー)字形に似た同一文様がある。瓦当の直径は 18.5cm、その厚さは 2.1cm である (図 3-4; 図 5-2)。瓦当正面の表面上には数多くの微細な平行のすじ――木目、それはすなわち文様を押し付けるための笵によって刻まれた、がある。瓦当背面にもまた表面をなでた放射状の痕がある。

瓦当の検討では、十二分に形状的特徴と加工痕について、特にそれら遺物全片に対して指摘を述べた。しかし上述した 2 種類の文様バリエーションを除くと、さらに 5 種類のバリエーションがみられる。そのため、以下ではこれらバリエーションの記述に注意を傾ける。これら瓦当のサイズについては、表 2 に示している。

バリエーション 3(図 5-3) の瓦当正面の外縁は、幅が狭く (0.3 ～ 0.9mm)、また低く、文様の輻射文もまた同様である。瓦当中央には方形の枠があるが、その他すべての瓦当バリエーションにあるような中央のくぼみはない。瓦当面は 4 つの区画に分割され、方形枠の辺から瓦当の外縁へ輻射状に線が伸びてい

る。各輻射状の線は、外縁の近くで対称に両側に巻き上がり、その巻き上がった先端は瓦中央へと向いている。

バリエーション 4 は先述のものに近いが、ここでは瓦当を四分する輻射線が中央の方形のくぼみの角から伸び、外縁の近くで 2 つに分かれて瓦当中央へ向かって巻き上がる。同時に、この巻き毛のようなものは、もしかすると区画中央の " 枝 " の間にあるものなのかもしれない (図 5-4)。瓦当 N0.59 の破片には正面表面に赤色塗料の痕がある。

バリエーション 5 は先述した 2 例とは異なり、放射状の輻射線から上へと巻き上がって外側の外縁方向へと曲がる脇枝が出ている (図 5-5)。

もっとも独創的な文様として特徴があるのはバリエーション 6 である。瓦当面の中央には、半球形突出部が方形のくぼみの中にある。周囲は " 新芽―巻き毛状 " 植物文様の湾曲する線あるいは弧線である。他のバリエーションと異なる特徴は、本例には文様区画がないことである (図 5-6)。しかしながら、完全な文様を復元することはできない。おそらくこれら瓦当の文様は、隣接するプラットフォーム (発掘 2) に伴うバリエーション 3 の文様と同じタイプであり、「S 字文タイプと読み解くことのできる複雑な植物文で、瓦当平面全体をうめつくしており、また中心に突き出る " 真珠状の装飾 " がある」[Danilov et al. 2011:44] とあるものだ。

赤色に彩色されており、かつ瓦当面にバリエーション 7 の文様を持つ唯一の破片がある。このバリエーションは 2 区画分が残存し、"Ж(ジェー)" 字形が区画線に結合した文様のある区画、弓状に湾曲して曲がる " 枝 " の付いた中央からのびる放射状の線のある区画、がある (図 5-7)。

発掘 3 と 4 で出土した瓦当の文様バリエーションは、上述列挙したものにとどまらない。若干の瓦当片上には上述したバリエーションとは異なる文様がみられるが、小片であったり遺存状態が悪かったりするため、現在のところ復元することができない。

全体として、隣接するプラットフォームで実施された 2007 ～ 2008 年発掘の公表資料にある瓦当文様の記述と比較すると、そこではバリエーション 1、2、5、そしてバリエーション 6 に近いものが発見されていたことが分かる [Danilov et al. 2011:41-44]。

テレルジーン・ドルボルジンの瓦当を韓蒙共同調査隊がトゥブ県(アイマク)バヤンジャルガラン郡(ソム)に所在するヘルレン川河谷のゴア・ドフ遺跡で実施した発掘の出土瓦当 [Eregzen et al. 2014] と比較すると、著しい違

表 2　瓦当の主要パラメータ（㎝）

No.	出土位置	文様種別	直径	縁 (幅 / 高さ)		瓦当の厚さ		赤色塗料の存在
				正面側	反対側	縁のある部分	縁のない部分	
2016-45	発掘 4, Ⅳ区 ,d-8, 第 6 層	1	20.3	0.7/0.2-0.4	1.5/0.9	2.5	1.2-1.8	有
2016-46	発掘 4, Ⅳ区 ,d-7, 第 6 層	1	19.3	0.7/0.2-0.3	1.5/1.4	2.6	1.2-1.7	有
2016-24	発掘 4, Ⅳ区 ,b-8, 第 4 層	1	22	0.45/0.1	2.0-2.3/0.9	2.75	1.7-1.9	
2016-26	発掘 4, Ⅳ区 ,0-10, 第 6 層	1	18.4	0.5/0.3	0.9-1.4/0.7	2.0	1.1-1.4	
50	発掘 3, Ⅳ区 ,kl-11/12, 第 5,7 層	1	19	0.7	2.0/0.6	2.5	1.6	有
84	発掘 3, Ⅱ区 ,i-4, 第 6 層	1	21	0.7	2.0	2.2	1.4-1.9	有
88-1	発掘 3, Ⅱ区 ,i-6, 第 6 層	1	18.8	0.4-0.9/0.2	1.6-1.9/0.8	2.3	1.3	有
2016-15	発掘 4, Ⅳ区 ,b-12, 第 3 層	1	19.9	0.5/0.25		1.1-1.3		
85	発掘 3, Ⅱ区 ,i-6, 第 6 層	2	20-20.5	0.8/0.2	1.7/1.0	2.6	1.2	
86	発掘 3, Ⅳ区 ,g-10, 第 7 層	2	19.5	0.5-0.7/0.3	2.0/1.2	3.2	1.3	
87	発掘 3, Ⅱ区 ,i-6, 第 6 層	2	18.5	0.5/0.2	18.2-18.4/0.1	1.7-2.1		
53	発掘 3, Ⅳ区 k-11, 第 4 層	3		0.9/0.2			1.3-1.5	
94	発掘 3, Ⅳ区 ,g-11, 第 7 層	3	15.6	0.3/0.2	0.6-1.5/0.6	2.1	1.4-1.5	
82	発掘 3, Ⅳ区 ,j-10, 第 6 層	4	17	0.3-0.5/0.2	1.8/0.7	1.8	0.9	
27	発掘 3, Ⅰ区 ,a-4, 第 6 層	5	15	0.6-0.8/0.1	1.1-1.4/1.3	2.5	1.0	
58	発掘 3, Ⅲ区 ,i-2, 第 4 層	5	18	0.5/0.3			1.0-1.3	
2016-23	発掘 4, Ⅳ区 ,d-9, 第 4 層	5	15.7	0.3-0.7/0.2			1.4-1.6	有
21	発掘 3, Ⅲ区 ,g-7, 第 3 層	6	17	1.0/0.6	1.3/1.5	3.0	0.7-1.0	
93	発掘 3, Ⅱ区 ,i-5, 第 6 層	6	17.5-17.8	0.8/0.3	1.0/1.5	2.8	1.0-1.2	
95	発掘 3, Ⅳ区 ,i-11, 第 6 層	6					1.1-1.3	有
2016-42	発掘 4, Ⅳ区 ,d-9, 第 6 層	6	18.8	0.8/0.4	2.0/0.45	2.5	1.5	
2016-38	発掘 4, Ⅳ区 ,d-12, 第 6 層	7	18.2	0.5/0.3	1.3-1.7/0.7	2.3	1.2	有

いがある。その類似点は、ここでは瓦当面の四分割と瓦当面中央の方形のくぼみに現れている。しかしその分割は、概して二重の放射状輻射線、ゴア・ドフの高く幅の広い瓦当外縁を生んでいる。

瓦当の起源に言及すると、疑いなくそれらは中国の瓦生産の伝統において作られたものである。原則として、文様の施文方法は笵から瓦当に文様を押し付ける方法でつけられた。笵の構成――放射状の輻射線による四分割、非常に低いレリーフ文様、というテレルジーン・ドルボルジン出土瓦の特徴は、中国の東周、戦国、漢 (前 8 世紀～後 3 世紀) の瓦当にも存在する。文様要素――先端が巻きあがる反対称になった弧線、S 字形の文様、は洛陽の東周と前漢の瓦当にみられるが、それらはここには存在しない異なった文様のものである [程永建 2007: 53, 190-191]。テレルジーン・ドルボルジンの瓦当を洛陽出土瓦当と比較すると、低いレリーフ状の区画線、一本の線での区画分割、低くかつ幅の狭い外縁、という特徴を見せ、それらは周～前漢 (前 4 ～前 2 世紀) の洛陽の瓦当に近い。しかし中国出土の瓦当には、テレルジーン・ドルボルジンの瓦当にあるのと完全に一致する文様はない。違いは木笵で文様が押し付けられたのであり、中国においてのように陶笵で文様が付けられたのではない点にも表れており、瓦当中央に方形のくぼみもある。これら 2 つは互いに緊密に関連している。2007 ～ 2008 年にテレルジーン・ドルボルジンの発掘で出土した瓦についてその著者が如何に正しく推測していたかは、以下で分かる。『瓦当本体は、我々が製品上で確認することができる文様のネガティブになった様々な文様のある轆轤上で製作された。それのみならず、匈奴土器の大多数の底部底面上に方形あるいは長方形状の回転台平面上に突出した軸の平面痕がある。』[Danilov et al. 2011:45]。明らかに、ここでは中国の瓦製作上に地域的な製陶の伝統が重なっており、匈奴製陶のための特殊な回転台は瓦当に文様を押し付けるための笵として、丸瓦未製品の製作過程で適用され始めた。そしてまた匈奴土器上の波線文様も同じく存在するのである。

明らかに、匈奴のモチーフが瓦当の主題文様の中に認められる。そこでは中央の円と線で繋がった S 字形文様の瓦当との関係が注目され、それはまたゴル・モドⅡ匈奴墓地から発見されたシャガイ上に刻まれたタムガにもある [Erdenebaatar D. et al., 2015 : 91, 224]。

テレルジーン・ドルボルジンの瓦の年代において、その制作技術もまた年代指標である。ここで重要な指標は、瓦凹面上に布目が見られないことである。これはおそらく、円筒形の未成品を徐々に乾き始めた後で個々の瓦に切断し、截頭円錐形の内型を布で包まずに形成したことを示している。おそらく、それら瓦は手で作った粘土紐によって形成され、乾いた後に切り分けられたか、あるいは切り目を入れてその線にそって分割された。このような製作技法は、漢代以前、すなわち前 2 世紀以前の古代中国に広がったものである。これについて、古代中国の首都であった長安出土の前漢瓦を研究した劉振東と張建鋒は、内型は丸瓦製造から使用され始めたとする。このような技法はすでに前漢前期の終わりには登場しており、前 2 世紀中葉には凹面上に布痕のない丸瓦がそこでも使用された。それとともに、瓦に瓦当を固定する方法も変わった。すなわち、瓦当は瓦本体と共に円筒形未製品から切り取られるのではなく、未製品から瓦が分割された後で瓦当を直接瓦に接着するようになった。平瓦は、型で製造されたものが前漢中期に現れ、その汎用は前漢後期、すなわち前 1 世紀～後 1 世紀初めに起こった [劉・張 2007]。もちろん、首都長安から遠く離れたところに型で製造する新たな方法が広まるのはかなり後であった。もっと遅い時期ではないかという疑いが、テレルジーン・ドルボルジンの丸瓦の玉縁部の長さから生まれる。前漢瓦の玉縁部の長さは、約 2.5cm である。しかし、テレルジーン・ドルボルジン瓦当の文様造形の特徴 (縁の幅が狭く低い) は、東周と前漢初期の瓦当に近づくものである。おそらく、テレルジーン・ドルボルジンの瓦は前漢、すなわち前 3 ～前 1 世紀のものとしなければならない。注目すべきことに、この年代は発掘過程で得られた資料に対する年代較正 (IntCal13) された放射性炭素年代は、前 355 ～ 47 年である。

プラットフォーム 4 の調査は、建物構造を復元することを概して可能にした。類似する建築は、建築の都市タイプを特徴づけていた。建物入口は南東方向に位置しており、そこへプラットフォーム 1 から伸びる小道が接続している。建物基壇は粘土造りの広まり (本来の意味でのプラットフォーム) に作られ、その周囲の縁は磚で強化し、外装されている。磚は構造体を強固にする意味で使用されており、

それについては磚破片の多数発見が証明している。最も完全な片を含めて、プラットフォームの最も縁端 (H-3, 4, 5, I-2, 3, 4, J-2, 4, K-3 区) に近いⅡ区の第 6 層、同じく同Ⅱ区のプラットフォームから南東で、磚が破壊を受けた基壇という形で発見された。明らかに、I 区とⅢ区 (2015 年)、またⅣ～Ⅵ区では、瓦は確認されていないか、あるいは若干の小片が出土しただけで、合計して 0.1kg を上回ることはない。瓦葺建物は柱構造を有しており、そのことついては小道の左辺のⅣ区 (2015 年) における柱穴遺構が証明しており、建物に入る入口正面であったであろう。建物屋根の倒壊した基本的な方向 (上層に基づく判断) は、Ⅱ区の南、南南西側である。瓦片の充満 (第 2 層) は、特に土城西壁に接して分離している。これはプラットフォーム上の建物の破壊が、一部の屋根は南東方向に崩れ、また一部はⅣ区 (2016 年) の瓦充満から判断すると北西方向に崩れた結果であるらしい。火事の痕跡は確認されない。

テレルジーン・ドルボルジンは、モンゴル地域における唯一の城址ではない。それから近いところ、すなわち 14km 南西にブルヒーン・ドルボルジン城址 (Бүрхийн лөрвөлжин) がある。遺跡はブルヒーン川 (ヘルレン川の左側支流) の右岸に位置している。ムングンモリト郡(ソム)からそこまで北東方向に約 8km である。城址は我々の調査隊によって 2 度――2009 年と 2015 年、に調査された。残念なことに、遺跡は現在ではほぼ川によって消滅している。加えて、その範囲を 2 本の自動車道が走っている。その道の 1 本は、城址域で 2 本に分かれている。防御施設は、北東側城壁の少しの部分 (長さ 35m) と北西側城壁の大部分 (長さ 135m) のみが残っている。

2015 年に遺跡の地形図 (図 6) を作成した。城壁はとてもひどく崩れている。その幅は 9 ～ 12m、高さは 0.2 ～ 0.3m である。南角に近い南西城壁の場所には、さらに 1 つのあまり大きくない長さ 26m の箇所がある。城址の各角は東西南北を指している。そのサイズはペルレーの記載 [Perlee1961: 33] に基づくと、180m × 180m であった。城址内の南西城壁の付近 (ほぼ中央) に、不明瞭な形のプラットフォームがある。その暫定的な大きさは、約 30m × 20m である。丸みのある楕円形をした別のプラットフォームは、約 30m × 30m である。それはほぼ城址の中央にある。両方のプラットフォー

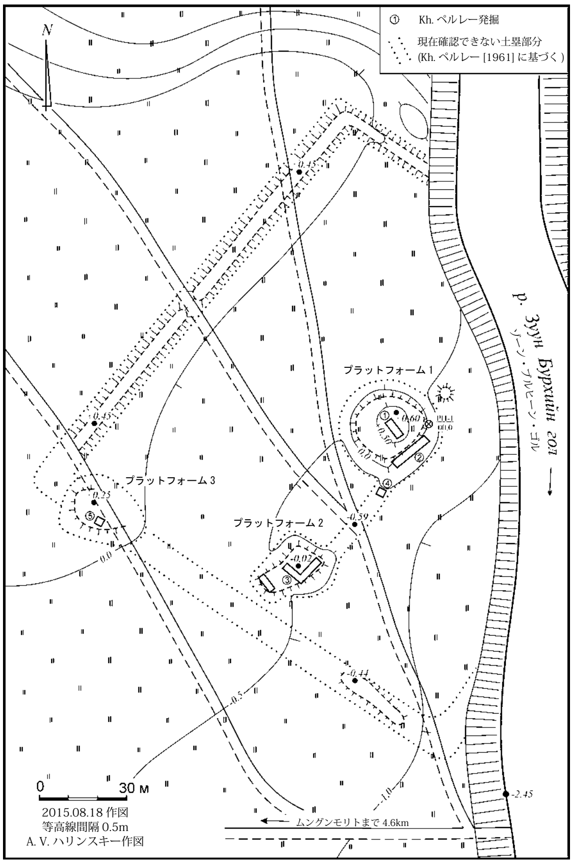

図 6　ブルヒーン・ドルボルジン

ムでペルレー発掘のくぼみがみられる。両建物は、テレルジーン・ドルボルジンにもあるように、間が道状遺構で結ばれている。

岸の断面は、層位学の痕跡を示している。それは、腐植土層 (1~25cm)、細礫岩 (25~47cm)、明黄砂質粘土 (48cm) である。文化層のいかなる痕跡も、テレルジーン・ドルボルジンと同様に存在していなかった。かつてここで、テレルジーン・ドルボルジンと同じく瓦と塼が見つかった。両遺跡の人為構造物はほぼ同一のものである。

ブルヒーン・ドルボルジン城址から約 41km 南にこの地域で最大の城址――フレート・ドフがある。その土塁の長さは 400m 以上である。いくつかのプラットフォームが城址内と 2 方向側にある。残念ながら城址は非常にひどく破壊を受けており、そこでは事実上全表土層がほぼ破壊されている。

上述した 3 城址全てで瓦が収集されている。ロシア科学アカデミーシベリア支部地殻研究所は上述 3 遺跡の資料の化学組成を調査した。フレート・ドフ城址 (試料№ 1~2)、テレルジーン・ドルボルジン城址 (試料№ 3~4)、ブルヒーン・ドルボルジン城址 (試料№ 5) である。化学組成は、出力 4kW の X

表 3　造岩酸化物の内訳

No.	Na_2O	MgO	Al_2O_3	SiO2	P_2O_5	S*	K_2O	CaO	TiO_2	MnO	Fe_2O_3*
1	1.59	3.51	15.83	56.26	0.17	0.014	2.91	8.23	0.94	0.096	7.13
2	1.86	2.35	16.05	61.08	0.42	0.013	3.11	4.48	0.79	0.096	5.61
3	1.12	1.72	19.51	52.88	0.33	0.041	3.46	0.92	1.24	0.10	9.23
4	1.73	2.51	17.45	58.96	0.27	0.033	3.34	2.5	0.95	0.065	5.93
5	2.04	1.51	18.05	63.42	0.21	0.012	3.27	2.12	0.75	0.10	6.16

備考：＊は総含有量

表 4　微量元素の内訳

No.	Sc	V	Cr	Co	Ni	Cu	Zn
1	0.002	0.008	0.005	0.001	0.003	0.003	0.011
2	0.001	0.006	0.005	0.001	0.003	0.003	0.010
3	0.002	0.009	0.006	0.001	0.004	0.003	0.014
4	0.001	0.007	0.005	0.001	0.003	0.005	0.009
5	0.001	0.005	0.003	0.001	0.002	0.002	0.013

表 5　微量元素の内訳

No.	Ga	As	Ba	La	Ce	Nd	Pb
1	0.002	0.002	0.058	0.004	0.006	0.004	0.003
2	0.002	0.002	0.062	0.004	0.006	0.004	0.003
3	0.003	0.003	0.050	0.005	0.009	0.004	0.004
4	0.002	0.002	0.062	0.005	0.008	0.004	0.003

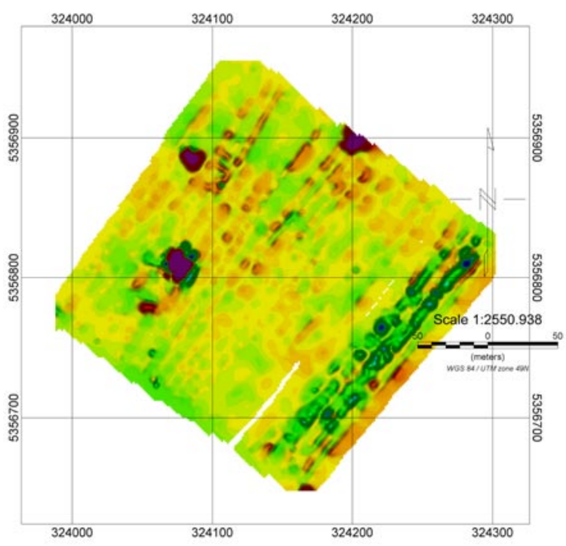

図 7　テレルジーン・ドルボルジンの
地球物理学調査の結果

線管球 (Rh（ロジウム）ターゲットと厚さ 75㎛のBe（ベリリウム）箔を貼ったＸ線取り出し窓のある構造) を備えたブルガー社 (Bunker AXS) の波長分散型Ｘ線分光器 TIGER を用いて蛍光Ｘ線分光法で分析した。

試料はあらかじめミルでアルコールを加えて粉末状になるまで細かく砕いた。発光体はホウ酸で作ったバインダーの上に試料 1g を置いて加圧したタブレットを用いた。それぞれの測定元素の集中性を測定するために最適なパラメータと測定条件を選んだ。測定元素のグラフの関係について、基本組成と中間組成の岩石 (SiO_2 成分は 44~64%)、その数値では KB(泥片岩) と SDO-9(赤色粘土)、の一般的な試料が使われた。

相互作用する元素の計算には補正を利用した。また実験強度において他の発光の関与を考慮した。

開発された方法を活用した内容物決定の精度は以下に適合することが求められ、P_2O_5, S, K_2O, CaO, Sc, TiO_2, MnO, Fe_2O_3, V, Cr, Co, Ni, Cu, Zn, Ga, As, Ba, La, Ce, Nd, Pb のためには第Ⅲカテゴリーの精度、Na_2O, MgO, Al_2O_3, SiO_2 には第Ⅳカテゴリーの精度で出された (GOST 41-08-205-04)。

分析で得られた結果は、表に示した (%)。

表３～５の分析結果は類似する化学組成を示した。いくらかの相違の存在は重要で、各資料における建築材料の独立生産、あるいは時代の相違を証明している。注意しなければならないのは、この場所に 4 基の匈奴城址があり、それらは事実上一直線上に並んでいるということである。仮にテレルジーン・ドルボルジン城址から地点を数えると、それから南 - 南西方向にブルヒーン・ドルボルジン (14km 地点)、フレート・ドフ (56km 地点)、ウンドゥル・ドフ (80km 地点)、バイシンティーン・デルス (112km 地点) がある。

これら全城址の機能的地位はすでに解明されている。プラットフォーム上にある瓦を伴う多くの建物のほかに、内には何も存在しない。生産活動を示すような人が住んだ痕跡はない。テレルジーン・ドルボルジン城址での地学探査によると、プラットフォームを除くとそこには如何なる構造物も存在しなかった (図 7)。つまり、城址を行政の中心とすることはできず、交易、農業、手工業の集中する場所とすることもできない。もしそれら城址を宗教的あるいは聖なる中心とするならば、以下の問題が

生まれる——彼らは如何なる神を崇めたのだろうか？よく知られているように、匈奴は天と地、太陽、月、その他天体を拝んだ [中央民族学院研究部主編 1958: 40, 41, 45]。プラットフォーム上の瓦を伴う建物にはこのような宗教的行為の痕が何も刻まれていない。むしろ無数のオボーと同様に、行われた儀式のために作られた場としてできたものなのかもしれない。もしかして、これは例えば死去したシャーマンなど抜きんでた人物の追善供養の施設なのだろうか？ しかし付近には抜きんでたクルガンはない。テレルジーン・ドルボルジン城址の瓦の類型学的分析、また放射性炭素年代値 [Ivliev et al. 2017] は、遺跡が匈奴帝国の早期段階——冒頓単于と彼の子孫の時期のものであること示している。全ての著名な匈奴貴族墓地が紀元前後交代期であることを考慮すると、我々が初期の単于は異なる埋葬儀礼 (司馬遷は暗示) であったとする編年に適合するものと考えられる [中央民族学院研究部主編 1958, 巻 1:17; Taskin 1968:44, 註 107]。しかしなぜ当時の証拠的物証がかくもオルドスから遠いところ——オルホンとヘルレンの河谷盆地に集中しているのだろうか？

おまけに中国の歴史書には、匈奴城址の存在に関連するか、あるいはそれら城址の建設に関連する如何なる情報もない [中央民族学院研究部主編 1958, 巻 1:204; Taskin 1968: 68, 91, 155, 註 30, 165; Taskin 1973: 23-24, 137, 註 19]。文献史料によると、匈奴統制下の草原において、都市は帝国を宣言したのちに出現した。秦代の匈奴について、「城郭、常処、耕田の業なし」とある。彼らにストックが存在しなかったことに伴い､それらを護る必要性がなかった。あちこちを動き回り、彼らは「まるで鳥の如く簡単に騒ぎたち」、そのため「彼らを支配するのは困難」であった [Taskin 1968:112]。けれども、冒頓単于と彼の戦闘・政治的功績は、漢の住民 (秦の支持者とその他の王ら、漢の興隆に不満のある者) のモンゴル草原への移民をまねいた [中央民族学院研究部主編 1958: 巻 1, 18,19; Taskin 1968:41, 42; Kradin 2002: 97]。中国人の集団は、遊牧民諸国を移動していた種族と戦闘部隊が " 天下 " に侵攻した時、占領に加わった [中央民族学院研究部主編 1958: 巻 1, 19,28,31; Taskin 1968: 42, 43, 47]。すでに草原上の匈奴帝国存在期の最初の 10 年間で大量の中国からの移住者が集まるというこのような状況は、中国の歴史叙述者が｢城｣とした定住址が出現する要因となった。そしてその後、漢帝国の国境地域に匈奴が侵入した際、" 天下 " の住民 1000 人が遊牧民の捕虜になった [中央民族学院研究部主編 1958: 巻 1, 34, 44, 45, 49, 50, 190, 205, 208; Taskin 1968: 51, 52, 53, 60, 79, 81, 82, 89; Taskin 1973: 20, 25, 29]。また、中国の将軍 (趙信、李陵、李広利) と捕虜の兵士の引き渡された出来事が知られている [中央民族学院研究部主編 1958: 巻 1, 44,49,51, 190-191; Taskin 1968: 53, 59, 61, 110; Taskin 1973: 19, 21]。

城についての最初の言及は、前 2 世紀 10 年代であり、韓王信に関係している。前 201 年に彼は漢帝国に背いて逃れ、馬邑を匈奴に差し出し、このために「北方異民族」と共に " 天下 " と交戦が始まった [中央民族学院研究部主編 1958: 巻 1,18; Taskin 1968: 41、66、68, 70]。ある話によると、韓王信は息子と共に匈奴の積當へやってきて、匈奴領のその地を与えられた [Taskin 1968: 68, 155, 註 30]。同様の城、おそらくハンガイ山脈の南にあった、は中国の将軍で匈奴に捕虜として投降した後伊稚斜単于の助言者となった趙信の名を有している (天山に近い趙信城)。趙信城には「匈奴の積粟」があり、それは前 119 年に漢の将軍衛青によって押さえられた。軍に食べさせ、衛青は残りの穀物を焼いた [Taskin 1968: 91, 165, 註 30]。残念ながら趙信城に関するその他の記録は残っていない。

城造営の企画は虚閭権渠単于 (前 68 〜前 60 年) が着手した。匈奴は漢軍の行軍を恐れ、助言者の衛律は単于を説得して井戸を掘って「城を築き」、穀物を貯蔵するための高楼を建て、漢に攻撃された場合、「秦人と共に城を守った」(秦人とは匈奴支配下にいた中国人の名称)。草原において建設作業が開始し、「何百もの井戸を掘り」、「何千もの木を切り倒した」が、防衛網の建設の真最中に単于は別の助言者の意見に変わった。その人が言うには、匈奴は城を防ぐことができず、攻撃された場合「漢に食糧を贈るようなものだ」と。このため衛律は城の建設を止めた [中央民族学院研究部主編 1958: 巻 1, 204; Taskin 1973: 23-24, 138, 註 24]。

20 世紀の考古学調査は、匈奴に定住集落と城が存在したという文献史料の情報を証明した。特に豊かなその表情はブリヤートのイヴォルガ城址の出土資料に現れている (ブリヤート共和国内にはまた、バヤン･ウンデル城址、ドゥリョーヌィ居住址、ニジニー・マンギルトゥイがある [Danilov 2004:

37-38; Konovalov et al. 2016])。イヴォルガ城址では暖房施設の炕を伴う住居群が調査されており、様々な遺物が発見されており、それらは農業生産、手工業、漁業に関係する城址住民の生業を証明している。家畜の構成では、ブタ、大型有角家畜、犬が優勢を占めており、一部にヒツジとヤギで、遊牧民畜群組成の特徴として 26%を越えない。出土品の中には中国の技術によって作られた多くのものがみられる。そのようなものの中には、漢字がみられる。同時期の墓地の研究は、「イヴォルガ」住民の中には著しく多くの人数の中国からの移住者がいただろうと仮定している [Davydova 1985; 1995; 1996; Kradin 2002: 81-86]。

草原と山の開けた地における考古学調査では、さらに約 20 か所の城郭施設 (土塁、壕、門、基壇状の高まり (プラットフォーム)) を伴う遺跡が発見されており、それらは匈奴帝国期のものである (テレルジーン・ドルボルジン、バルス・ホトⅡ、ゴア・ドフ、フレート・ドフ、ブルヒーン・ドルボルジン、ウンドゥル・ドフ、バイシンティーン・デルス、ボローギーン・ソーリン、ショウォーティン・ゴリン・ヘレムなど [Danilov 2004: 40-47; Danilov et al. 2011; Ivliev et al. 2017: 118-136])。20 世紀中葉の最初の組織的な匈奴「城」址の研究は、Kh. ペルレーによって主導された [Perlee 1957: 44-45; 1961: 30-34]。一連の匈奴期の遺跡は、Ye. V. シャウクノフ [Shavkunov 1973]、Ts. ドルジスレン、林俊雄、D. ツェベーンドルジ、I. エルデリ [Danilov 2004: 46-47] によって研究が行われた。

テレルジーン・ドルボルジン [Danilov 2011; Danilov et al. 2011; Ivliev et al 2017] やゴア・ドフ [Eregzen et al 2014] といったこれら城址の調査は、匈奴遺跡の研究において新たな 1 ページを開いた。その際に得られた成果は、要塞城壁と遺跡範囲にプラットフォームがあるにもかかわらず、それらは要塞化した居住地あるいは都市とすることが許されなかった。それは人間の活動――住居、家畜の骨、手工業製品、工具、土器、経済的ストック、そしてその他遺物が存在しなかったためである。実を言うと、上述の遺跡においてプラットフォーム上の建物の存在に関して言うと、人間集団のいずれかの場所での居住の重要な証拠となる文化層が存在しない。

2015 年の調査後に提出された仮説により、墓上構造物かもしれないとプラットフォームを調査しながら考えていたが、2016 年にはその確証が得られなかった。2016 年の発掘 4 Ⅳ～Ⅴ区をでは盗掘坑が確認された。深くなくまた草に覆われたくぼ地から、「盗掘」の目論みがかなり古い時代に行われたのであって、18 ～ 19 世紀の盗掘 (ブグロヴァニエ) ではないと推測することができる。これら発掘調査区の地山にまで達する調査坑は、古代旧地表の水準上に墓坑が存在しなかったことを明らかにした。

2017 年 4 月にウランバートルで開催された「古代遊牧民の城郭」シンポジウムの学術討論では、その会議で提出された匈奴期の城郭施設とプラットフォームを伴う遺跡についての議論 (単于居城、匈奴支配層の夏の居城、宗教的儀式を執り行った場所など) は 1 つもなく、現在のところ得られた考古資料によって論証することはできず、モンゴル領内で発見された考古遺跡の機能的役割に関する問題は残っている。いずれにせよ、匈奴の遺跡調査を継続することが必要で、遅かれ早かれ新たな発見が上述した課題の答えの獲得を可能にするだろう。

謝辞：

ウルスラ・ブロッセダー (Ursla Brosseder)(ボン大学) に遺跡の年代測定値提供に協力していただいたこと、また T. S. フィリョーヴァ (Т. С. Филёва) と E. V. フドノゴヴァ (Е. В. Худоногова)(ロシア科学アカデミーシベリア支部地殻研究所) に匈奴の瓦の化学分析に協力していただいたことに対し深く感謝いたします。我々はまた、我々の依頼に沿って 2015 年に城址領域を探査してくださったモンゴル国立大学の地球物理学者の方々に心から感謝いたします。

参考文献：

ГОСТ 41-08-205-04. Стандарт отрасли, 2004, *Управление качеством аналитических работ. Методики количественного химического анализа. Разработка, аттестация, утверждение*, М: 105. [GOST 41-08-205-04. 一般部門 . 品質分析局 . 量的化学分析の方法 . 研究、資格検査、証明 .]

Davydova A. V.: Давыдова А. В., 1985, *Иволгинский комплекс (городище и могильник)—памятник хунну в Забайкалье*, Л: Изд-во ЛГУ. [『イヴォルガ遺跡 (城址と墓地) －ザバイカルの匈奴遺跡』]

Davydova A. V.: Давыдова А. В., 1995, *Иволгинский археологический комплекс. Иволгинское городище, (археологические памятники Сюнну,* вып. *1)*, СПб:

Центр «Петербургское востоковедение». [『イヴォルガ遺跡 . イヴォルガ城址』(匈奴の遺跡 1)]

Davydova A. V.: Давыдова А. В., 1996, *Иволгинский археологический комплекс. Иволгинский могильник, (археологические памятники Сюнну,* вып. *2)*, СПб: Центр «Петербургское востоковедение». [イヴォルガ遺跡 . イヴォルガ墓地』(匈奴の遺跡 2)]

Danilov S. V.: Данилов С. В., 2004, *Города в кочевых обществах Центральной Азии*, Улан-Удэ: Изд-во БНЦ СО РАН. [『中央アジアの遊牧社会における都市』]

Danilov S. V.: Данилов С. В., 1998, Раскопки здания на хуннском городище Баян-Ундэр в Джидинском районе Республики Бурятия, *Археология и этнология Дальнего Востока и Центральной Азии*, Владивосток: Институт ИАиЭ ДВО РАН. [「ブリヤート共和国ジダ地区に所在するバヤン - ウンデル匈奴城址の建物の発掘」『極東と中央アジアの考古学と民族学』]

Danilov S. V.: Данилов С. В., 2011, Городища хунну Монголии и Забайкалья (к вопросу о функциональном предназначении поселенческих комплексов хунну), *Хунну: археология, происхождение культуры, этническая история*, Улан-Удэ: Изд-во БНЦ СО РАН. [「モンゴルとザバイカルの匈奴の城址 (匈奴居住遺跡の機能的用途についての問題に関して)」『匈奴：考古学、文化の起源、人種の歴史』]

Danilov S. V., Imenokhoev N. V., Nanzatov B. Z., Simukhin A. I., Ochir A., Erdenebold L.: Данилов С. В., Именохоев Н. В., Нанзатов Б. З., Симухин А. И., Очир А., Эрдэнэболд Л., 2016, Города эпохи хунну на востоке Монголии, *Известия Иркутского государственного университета. сер. Геоархеология, этнология, антропология. Т.17*, Иркутск: 74-93. [「モンゴル東部の匈奴時代の城址」『イルクーツク国立大学報』地理考古学・民族学・人類学シリーズ 17 号]

Danilov S. V., Simukhin A. I., Tsidenova N. V.: Данилов С. В., Симухин А. И., Цыденова Н. В., 2011, Черепица из хуннского городища Тэрэлжин дэрвэлжин (Центральный аймак Монголии), *Хунну: археология, происхождение культуры, этническая история*, Улан-Удэ: Изд-во БНЦ СО РАН. [「テレルジーン・ドルボルジン匈奴城址から出土した瓦 (モンゴル国トゥブ県(アイマク))」『匈奴：考古学、文化の起源、人種の歴史』]

Ivliev A. L., Kradin N. N., Kharinskii A. V., Ochir A., Vasyutin S. A., Kovichev E. V., Erdenebold L.: Ивлиев А. Л., Крадин Н. Н., Харинский А. В., Очир А., Васютин С. А., Ковычев Е. В., Эрдэнэболд Л., 2017, Предварительные результаты исследований хуннского городища Тэрэлжийн-Дурвулжин, *Теолия и практика археологических исследований 2017-2*, 118-136. [「テレルジーン・ドルボルジン匈奴城址調査の予備報告」『考古学研究の理論と実践』2017-2]

Konovalov P. K., Bazarov B. A., Miyagashev D. A., Klement'ev A. M., Imenokhoev N. V.:Коновалов П. Б., Базаров Б. А., Миягашев Д. А., Клементьев А. М., Именохоев Н. В., 2016, Хуннская археология в Бурятии: история и новый этап исследований, *Вестник БНЦ СО РАН 2016-1*, Улан-Удэ. [「ブリヤートにおける匈奴考古学：歴史と研究の新段階」『ロシア科学アカデミーシベリア支部ブリヤート科学センター報』2016-1]

Kradin N. N.: Крадин Н. Н., 2002, *Империя хунну*, М: Логос. [『匈奴帝国』]

Kryukov M. V., Perelomov L. S., Sofronov M. V., Cheboksarov N. N.: Крюков М. В., Переломов Л. С., Софронов М. В., Чебоксаров Н. Н., 1983, *Древние китайцы в эпоху централизованных империй,* М: Наука. Главная редакция восточной литературы. [『中央集権的帝国時代の古代中国人』]

Perlee Kh.: Пэрлээ Х., 1957, К истории древних городов и поселений Монголии, *Советская археология 1957-3*, М. [「モンゴルの古代城址と居住址の歴史に関して」『ソビエト考古学』1957-3]

Perlee Kh.: Пэрлээ Х., 1961, *Монгол ард улсын эрт дундад үеийн хот тууриныы товчоон*, УБ. [「モンゴル人民共和国の古代・中世城郭概要」]

Taskin V. S.: Таскин В. С. [предисловие, перевод и примечания], 1968, *Материалы по истории сюнну: по китайским источникам, вып.1*, М: Наука. [『匈奴史料：中国史料より』巻 1]

Taskin V. S.: Таскин В. С. [предисловие, перевод и примечания], 1973, *Материалы по истории сюнну: по китайским источникам, вып.2*, М: Наука. [『匈奴史料：中国史料より』巻 2]

Shavkunov Ye. V.: Шавкунов Э. В., 1973, Обследование гуннских городищ в Монголии, *Археологические открытия 1972 г.*, М: Наука. [「モンゴルの匈奴城址調査」『考古学の新発見』1972 年]

Eregzen G., Bayarsaikhan M., Aldarmönkh P.: Эрэгзэн Г., Баярсайхан М., Алдармөнх П., 2014, «Гуа дов» хэмээх хүннүгийн хотын турьд хийсэн археологийн малтлага судалгааны урьдчилсан үр дүнгээс, *Монголын археологи 2013он: ШУА-ийн археологийн хүрээлэнгийн, 2013 оны хээрийн судалгааны үр дүн*, УБ: 42-47. [「「ゴア・ドフ」と呼ばれる匈奴城址で行った考古発掘調査の予察報告『モンゴル考古学 2013 年 (モンゴル科学アカデミー

考古学研究所 ,2013 年野外調査成果)』]

Danilov S. V., 2009, Typology of ancient settlement complex of the xiongnu in Mongolia and Transbaikalia, *Xiongnu archaeology*, Bonn: Vor-und Frühgeschichtliche archäologie, Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität Bonn.

Erdenebaatar D., Iderkhangai T., Mijiddorj E., Orgilbayar S., Batbold N., Galbadrakh B., Maratkhaan A.; Эрдэнэбаатар Д., Идэрхангай Т., Мижиддорж Э., Оргилбаяр С., Батболд Н., Галбадрах Б., Маратхаан А., 2015, *Балгасын тал дахь Гол мод-2ын Хүннүгийн язгууртны булшны судалгаа*, УБ. [『バルガスィン・タルに所在するゴル・モドⅡ匈奴貴族墓の調査』]

Ramseyer D., Pousaz N., Törbat T., 2009, The xiongnu settlement of Boroo Gol, Selenge aimag, Mongolia, Current Archaeological Research in Mongolia: Papers from the first international conference on “Archaeological Research in Mongolia” held in Ulaanbaatar, August 19th-23rd 2007, (Bonn contributions to Asian Archaeology, vol.4), Bonn: Vor-und Frühgeschichtliche archäologie, Rheinische Friedrich-Wilhelms-Universität Bonn.

＜中国語＞

陝西周原考古隊 1981「扶風召陳西周建築群基址発掘簡報」『文物』1981-3

中央民族学院研究部主編 1958『歴代各族伝記会編』中華書局

程永建 [編著]2007『洛陽出土瓦当』科学出版社

劉振東・張建鋒 2007「西漢磚瓦初歩研究」『考古学報』2007-3.

翻訳後記：

本稿は下記論文の邦訳である。

Крадин Н. Н., Ивлиев А. Л., Васютин С. А., Харинский А. В., Очир А., Ковычев Е. В., Эрдэнэболд Л., 2018, Раскопки городища Тэрэлжийн-дурвулжин и некоторые итоги изучения хуннской урбанизации, ***Актуальные вопросы археологии и этнологии Центральной Азии. (Материалы II международной научной конференции, посвящённой 80-летию д.и.н., проф. П.Б. Коновалова)*****, Улан-Удэ: БНЦ СО РАН: 163-175.** [『中央アジアの考古学と民族学の焦眉の問題』(P. B. コノヴァロフ教授 80 歳記念献呈 , 第 2 回国際シンポジウム資料集)]

翻訳にあたっては、筆頭著者であるクラーディン教授より図版の提供など便宜を図っていただきました。深く感謝いたします。また、本翻訳は日本学術振興会特別研究員 PD としての研究成果の一部です。

訳出にあたり

本訳文の表題では、遺跡名を「テレルジーン・ドルボルジン城址」とした。しかしドルボルジンはモンゴル語で城址を指す語であり、実は意味が重複している。これまでの著作の中では「テレルジ城址」と日本語表記したものもある (「テレルジーン・ドルボルジン」は「テレルジ<u>の</u>城址」であり、属格の付いた表現になっている)。日本語として一見して分かりやすくまた意味も正しいその表記を採用することも考えたが、本稿の英題が「Tereljin-Durvuldjin fortress」となっているように (露文においても同様)、相互理解の上ではドルボルジンのある名称の方が良い。したがって、表題には分かりやすいように「城址」を加え、本文中では省いている。

参考のために記すと、城址・居住址を示す語はその他にもある。ドルボルジン、ドフは四角形を意味し (すなわち四角形の囲郭施設の痕跡がある)、ヘレムは城壁、フレーも囲いあるいは囲まれた場所 (すなわち町)、バルガスは城壁都市、トーリはその城壁都市の廃墟、ソーリンは居住地をそれぞれ意味している。定住遺跡にあたる語をどのように訳出するかはまさにそれにどのような機能的役割があると考えているのかと直結しており、研究において問題になっている点でもある。訳出では городище（ゴロディシェ）と поселение（ポセレーニエ）を城と集落 (それが遺跡である場合には城址と居住址) の語でひとまず訳出している。